

→
圃場見学会の様子。タキイからは端境期の4〜5月どりに適した品種として「夢舞妓」と「YR若空」、栽培適応幅の広い「夢ごろも」を中心にご紹介した。



平

成28年11月30日、滋賀県のタキイ研究農場にて、リレー出荷高度化協議会の研修会が開催されました。当協議会は平成27年に設立。加工・業務用野菜のサプライチェーンを構築することを目的とし、産地と加工業者、輸送、農機、施設、種苗などの業種の垣根を越えた業界関係者と農水の研究機関などが参加しています。発起人である木村幸雄会長（株式会社彩喜 取

リレー出荷 高度化協議会の取り組み

木村幸雄会長に聞く



加工・業務用キャベツの
サプライチェーン構築に向けて

締役社長）に協議会の取り組みとその意義について伺いました。

安定的周年生産のための 産地間リレーの構築

野菜流通カット協議会の会長でもある木村会長は、日本のカット野菜を推進していく中で、需要の高いキャベツこそ産地間リレーが必要と考えたといえます。ここで重要なテーマとなったのが収穫作業の機械化です。

低コスト・大量生産を実現するためには作業の機械化が必須ですが、従来の市場向け出荷の産地では対応が難しい状況でした。そんな中で協議会の方針に賛同し機械収穫を実現できる北海道J A鹿追町、静岡県J Aとびあ浜松、宮崎県J A尾鈴と連携してリレー出荷をスタート。冷蔵貯蔵や輸送面においても、低コスト・安定供給を目指した総合的な取り組みを行っています。

安定供給にはいかに産地リレーをスムーズにつなげていくかが鍵となります。課題は、周年リレーの中でも4〜5月どりの作型。日本の気候ではこの時期の加工・業務用キャベツの栽培が難しく、対応できる品種が限られていました。また、常に安定した出荷の求められる加工・業務用キャベツでは、冷蔵貯蔵して物量を賄う必要がありますが、産地では貯蔵の経費を抑えたいという思いがあります。収穫可能な時に出して終わったら次の産地につなぎたい。これには産地リレーの細分化が必要です。木村会長は種苗会社、品種の開発と共に、新たな産地づくりのための栽培指導を含めた産地指導を期待されています。

農家の安定収入と 日本の農業の未来のために

加工キャベツの産地では収穫機の性能が上がったことなどから歩どまりが

向上し、10a当たりの単収が上がって面積も増えました。また、播種と生育管理のみを行い、収穫を業者に任せる所ができるなど、省力大規模栽培が広がり、安定出荷が図れています。協議会では今後、加工業務契約出荷専門の産地の推進を図っていく計画です。こうした産地を増やすことが農家の安定収入と輸入対策になると考えています。「リレーの流れをつくっていくのが我々の仕事。各産地が収穫機械などの物資を含めて情報を共有していく流れをつくりたいと思っています」と木村会長。業種間を越えた協議会の取り組みに今後も期待が高まります。



↑青果物流会社である(株)彩喜の現社長でもあり、長年、青果流通に携わってこられたリレー出荷高度化協議会の木村幸雄会長。